

## インバネスの中華料理店

宮口 侗 迪

1987年の7月、スコットランドのインバネスという町に一泊したことがある。ネッシーで名を馳せたネス湖の観光拠点となっている町である。エジンバラを朝早く発った列車からは、好天のもとで、氷河に削られたハイランドの景色を余すところなく眺めることができ、かなり満ち足りた気持ちでインバネスの駅に降りることができた。

満ち足りた気持ちには別の理由もあった。その3日前、ロンドン勤務の友人といっしょに、セントアンドリュースのオールドコースでゴルフをする幸運に恵まれ、さらに1日おいてグレンイーグルズという名門ゴルフ場で自己最高のスコアを出すというおまけまでついて、ロンドンに戻る友人と上気嫌で別れたのが前夜のことだったからである。

ちなみにセントアンドリュースはパブリックコースなので、この日のプレーは早くからの友人の応募と抽選の結果であった。指定された午後4時30分のスタートのために、われわれはその日の朝6時に友人のベンツでロンドンを出たのである。直線距離では、東京から岡山あたりまで突っ走ったことになる。夕刻のスタートだったが、北緯56度をこえる地のこと、ホテルに引き上げた午後9時頃にも、夕陽はまだ淡い光を投げかけていた。

インバネスの町から、半日ツアーのマイクロバスでネス湖に近づくころになると、空にはわかにかきくもってきた。もともとこのあたりは夏に好天が続くことなどないらしいのだが、道路から見下すネス湖の霧囲気は、まさに陰うつといったものだった。岸辺に残る荒れはてた古城も、ますますその霧囲気を強めていた。風も冷たく、この風景の中でネッシー観光にがんばるスコットランド人に敬意を表しつつ、私はジャンパーのファスナーをしっかりと閉じて、しばしネス湖のほとりに立ちつくしていた。

インバネスの町は、観光地といっても、商店は

夏は明るいうちに店を閉めてしまう。あまり人通りのない通りを、手頃な夕食の場を求めて歩きまわっているうちに、一軒の中華料理店にぶつかった。どちらかというとうらぶれた感じであったが、あまり美味しいものに出会わないロンドンの街でたびたびチャイナタウンの厄介になっていた私は、こんなさい果ての街で頑張っている中国人がいるのかと嬉しくなって、その店に入った。

少しうす暗い感じであったが、それでも12個前後のテーブルがあり、地元の人らしい2組の白人の客がいた。メニューをみると、本格的な中華料理店に比べると少ないものの、40種程度の料理の名が英語と漢字で書かれていた。よくまあこんなところで材料が揃うものだと思いつつ、60才を過ぎたぐらいの店主に「老酒はあるか」と尋ねると、あまり愛想のよくない顔で「イエス」という答えが帰ってきた。

注文した野菜料理と麺は、イギリスでの私の舌の基準からすると十分に美味しく、老酒もまざるものであった。材料もクワイやキクラゲのような基本的なものはしっかりと使われており、自らの文化をゆずらず、なお世界のすみずみに根づいて生きる中国人の姿に、あらためて敬意を感じざるを得なかった。

ジャスミン茶を数杯おかわりしながら、店主にいつごろからこの店をやっているのか聞いてみた。彼は、16年前にエジンバラの店を畳んで、インバネスに移って来たのだと答えた。この北の果ての町が観光地として発展すると考えて、自分もひともうけを目論んだのだという。残念ながら彼の読みはぴったりというわけにいかず、彼の表情からは、淋しさは消えそうになかった。翌日、代表的な不況都市グラスゴーを訪れた私は、目抜き通りの閉鎖されたレストランの前で、あらためて彼の顔を思い浮べていた。